



芭蕉翁文集

三



芭蕉翁傳



祖為八住智國松植々々り彦少して河津清光末裔  
兄ハ松尾忠房といふ者ニ男とて正保元年生  
初の名ハ津七治小忠房と改む

延寶以前ハ惟書少々名と宗卷といふは桃青  
と書ハ東郡下向の後のことハ宗房といふ  
元代目松尾忠房といふ河津清光と勅じ号  
桃流種ハ傳記書籍并芭蕉桃青杖頭撰れ  
名印ハ其外自画撰物等秘蔵之

國主藤堂家の同性同姓同上野城土城新七郎



く水方の及史をくし舟人の名信守く其係  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
能治とて世の業とてくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

沖川六郎堀といふ所小菴とてふし嘉和二年述立伝有  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

と極く

芭蕉ゆららして輿小舟とつゆ波

の吟有じりらして後宗と芭蕉庵と名はしりて

くを成の存し一称くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

年甲午二  
月下三  
日



細い川の流るる木と汲らう〜  
妙く滑らかな道なき〜  
平らな道なき〜  
世間の山甲ならぬ〜  
葦原と青竹と竹と〜  
元徳二年少く〜  
と竹多し、仰高の人他い〜  
もせ清とまき〜  
まき集物の心を〜  
今もてさのりれ〜

〜松ひ〜  
い〜  
き〜

松島の嶺

柳のふか〜  
凡洞を西湖と〜  
浙江の湖と〜  
天竺の〜  
〜  
抱つ〜







とまの金鳥り 飛せしん事と

許小離別の辭

木鳥路とて 四里小蹄一人 廣川氏所宗を  
古く 風雅の信有人 小坡小茂とて 草薙小  
とと いしん 破るまよ ねあめとて じんをせん  
く 物のま成 知すと 徳しん 介は反あひ けの境  
長剣と 徳いしん ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
さら 雲のまよ ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
とあひ 人のり ちん ちん ちん ちん ちん ちん

推の礼ん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん ちん

夢の辨

夢小杜因のちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
水と受る ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
柳五国 ちん ちん ちん ちん ちん ちん  
ちん ちん ちん ちん ちん ちん



酒居堂の記

山を神として性多き人の水は初く情を思ひ物執  
二りのあつて後めとらむもの之酒田本味を  
まう目小酒造とぞいふ風推を留して酒とぞ  
いふ塵と流すもく酒居をといふ門は戒幅  
とありてふ別のこといふと花をいふと酒の  
宗造の客ありあつてきぬく一等加へたるは  
をいふ簡しくあつた方又なるもの二男体銀より  
俣とつてあつたものぬくとんやと極石とあ  
つて彼の我とるなり

録  
巻

柳そのの浦は熊田屋流るとんやの神といふ湖  
とありていふとつて向ふ海に流すものさうなり  
ゆつたねの江名はとつての目夜あつたはあつた徳と  
斜あつて音ねるは音のあつていふとつていふ  
昔酒の元とあつたかつて後山は月と新あつた  
新濃抹の目いふとつていふとつていふとつて  
是とつていふとつていふとつていふとつて  
いふとつていふとつていふとつていふとつて

げばの秋は... 清きせら... 萬念を...

あゝ... 女... 暮を...

いり魂... 洞き... 白り... 今... 今...

後と... 月... 暮... 小海...

廿... 宣... 今... 今...

か... 首... 今...

く... 今...

あ... 今...

を... 今...

い... 今...

一... 今...

よ... 今...

...



自筆心づの書と云ふ所ありて  
しそめぬありてこれ目とありて  
紙とては又小乾して又ほほと  
をとほいこり漆とてこして  
亦もこの種おこすや出早あり  
妻おまを叩く吹かしてゆる  
ゆるり規矩のこころ中へあ  
波の面々の色さるはるあま  
あ見ふ行ん其入のちと杖と  
時とてはこころふりてゆる  
ゆるり再ひ宗徳の時もと  
掃く筆の申すこと月ゆり

世にゆるりて又ふ宗徳の書  
桃音書

素堂の母七千修り七千の  
先は万葉七修り七千の  
結繩又ゆるり七修り七千の  
七修り七千のゆるり七千の

案ありてゆるり七千のゆるり  
ゆるり七千のゆるり七千の

うらやみ清きまゝかきし山家集に載らぬ  
いづらる信指もやとえに坊なる月  
糸の戸の月やと信のこゝ坊

浮城のふ又まの筆ふらりけりゆのま書あつての  
ゆきひくゆきまあやふえにけり旅れ  
心とあつてくゆら又波の目向う書あつて切  
序とまゝにらりらと今まやゆ

月心留り書あつてせん

月子信方とてゆきまゝと信とてゆきまゝと  
とまゝにゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝに  
信と信と月信とゆきまゝと

ゆきの城と遠ゆきまゝに日課とてゆきまゝに  
ゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝに  
誰はゆきまゝに日課のゆきまゝに

後色芭蕉

舟文とてゆきまゝにゆきまゝに

胸中一物とてゆきまゝにゆきまゝに  
ゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝに

一の如く... 一筆... 其の...

まじく... 隆興... 梅... 其の...

之... 舟... 舟... 舟... 舟...

黄... 地... の... 流... 松... 松... 松...

胡... 住... 居... 居... 居... 居...

月... 中... 中... 中... 中... 中...

あ... じ... じ... じ... じ... じ...

わ... ち... ち... ち... ち... ち...

樹... か... か... か... か... か... か...

飾... 几... 几... 几... 几... 几...

風... 小... 小... 小... 小... 小...

新... 葉... 日... 日... 日... 日...

軍... 一... 一... 一... 一... 一...

流... 石... 石... 石... 石... 石...

芭蕉葉、梅、楸、菫の序

巴... 東... 東... 東... 東... 東...

あ... ち... ち... ち... ち... ち...

ゆ... げ... げ... げ... げ... げ...





考ふ所の事... 小幡然とせむ...  
... 小幡吹萩...  
...

古法を用ふる教白

常や牛の乳を煮る老し湯...  
... 芥りやや煮たり...  
...

... 白くみ集と見ふ... 老の膏... 病を...  
... 熟法... 化ら...  
...

... 酒... 湯...  
...

... 酒...  
...

... 日... 糖... 糖...  
...

... 糖... 糖...  
...

... 家の記...  
...

... 杭... 糖...  
...

... 油... 糖...  
...

禪定の衾とせん白きハ是と母夜叉の  
敷てゆきしるやゆらぬきと流るる  
棺の中よらけとて

よの夢よいつくの境をいふさま 如行

題人夜回春

死のたを存とくせん 夜食 竹戸  
虫千のくきとけしんゆきゆ  
しらぬより存え候や 夜食  
初めは初と見えやいゆき

牛之ハ雁居かゝるも多者くし  
舟の腰有らと梅 祝詞  
人ありとや

也あそえとす者見くつ死つら  
はせとまふとていつひもあつた  
目もあつたや 後 慈みあつた  
切のそらに女は夜食下陸奥の料  
ようりあつたその祝とけり  
若あつた秋の望まよては



ほろいけいふらほまひ。こゝろ  
くわくあゝ。年々うらみ人  
名。年々うらみ人

あつらひのほろいけいふらほまひ。こゝろ  
くわくあゝ。年々うらみ人  
名。年々うらみ人

あつらひのほろいけいふらほまひ。こゝろ  
くわくあゝ。年々うらみ人  
名。年々うらみ人

あつらひのほろいけいふらほまひ。こゝろ  
くわくあゝ。年々うらみ人  
名。年々うらみ人

梅さくしひくし津波の波

あの中ふりあし吹鐘

湖の水海くし町りく

いさくしとくしとくし

月影の清の借ぬは娘ひや

物屋の付くしよまんのき

い糸賣り糸れは芥女あつし

らんとくしとくしの中しき

條の若賣りの女の荒く安ん

し白髪とてはあつし一物

栗原のふさの神原なるり

繪とくと見れはえは三年

根の葉と雨と晴れは小夜橋

まはりの月のやうり片彼

はひいさの白ひしとくし

深草のつらつとくし川

網罟とよこれに嫁のむ教て

おのまうしとくし初外

はるあけの初とくしとくし

新とくしとくしとくし

指令のありふる属おる池又は  
お裁くは改修の并月  
冷飯の結く破くもの何なる

杜津の舟へきふしと傳依  
二葉くく光のくその芳くく

空保と見えぬおの空障

か紙のゆめゆめと志くく

いふ世のやさむのそ見えく

名月と念の入るに梅んが

さくさくぬちと属く空らん

横の葉めさきのお葉くく

赤城ててるあてくく

い界くめんな霜老のほく

潮子くくおく吸ゆの静く

飛ぶ從争のゆめ春んが

風新ハ片ぬ物くく

長林合乙由ハ舟の映身くは返海を個て傳  
くを起せく是又一部の風流くく  
あくく獨りお他も





門海の千が索しわさうり  
完くそあ。旭のね記  
一時向敷よりえへ荷くり  
糸の湯の憶り深く是倚  
眼鏡あはあしく目と鏡  
鏡はつせれく鏡は静く  
比はたはあしく是る物さ  
島くあしく仙巻の行は  
管あけておふねの月慮  
野り釣れくつる物と  
智度の形を帯り見せ  
薄々りり見く機と形さ  
望遠く幸例あくとすり各  
沙溝くりりひ河神  
ねねと金木の巻とあらま  
るりく傳あつる痛のあつる

延寶元和年中ありしよし正風と建ませり  
ひまのきい抱りてくし中侍り信り又みまの念を  
中し謎杯のあさありし是ホハ皆俳諧方の作ま  
りてとありしとて奥州の柳の春を  
有は江柳の目と心とすまをまふし

庭門の注本流、文庫よりと新の春  
詠桑人歌て夏の沙やりとと  
あやみまの 新の箱のこれと登  
海やはとと脚る山の丹  
柳柳のあはれ

管と魂と眼るり 壺 柳  
萩とくや一はと柳を山のた  
ひりて夏殺又夏とく角口取  
申る身最付にむとえとく 政い看  
歎えとて

ひ月のあはれや 夕一ヶ條  
指しあはれとて 柳のあはれ  
あはれあはれとて 柳のあはれ  
根のあはれや 花のあはれとて  
い柳とて 柳のあはれとて



女とくは初とぬむ有違ひ

菅金買水

水苦く 偃氣り 咽とらるやせり  
相向風の身ハ 竹新と 仰る式

素堂の句

貞固の松りさ 門くさかたぬり  
流り遠の葉も 心くさかたぬり  
も亦ハ 清り 信り あり ぬと 仰る式

其角とら 流りさ 門くさかたぬり  
貞固の松りさ 門くさかたぬり  
流り遠の葉も 心くさかたぬり  
も亦ハ 清り 信り あり ぬと 仰る式

幸清の松ハ花より 流りさ

一句の角尻言外のいも 追原の人といふ見破  
しる成度 其角とら 流りさ 門くさかたぬり  
貞固の松りさ 門くさかたぬり  
流り遠の葉も 心くさかたぬり  
も亦ハ 清り 信り あり ぬと 仰る式

是と云ふ

只眼ありたる心と

三年の且爾、意門のさやぐも易と流汗  
の流せし、字にほんぬ、彼にこのぬま  
ぬく、病の要、風を印ら、同門の人、  
や、の、能、愛、凡、は、其、角、の、彼、皆、廣、  
於、の、の、く、一、膚、と、さ、く、人、な、う、ん、を  
可惜

ま、東、曰、神、道、門、の、く、く、く、く、く、く、く、  
く、神、の、ま、ま、又、州、の、あ、又、く、元、の、く、く、く、  
其、月、の、あ、り、其、の、く、く、く、く、く、く、  
の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、  
其、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、  
神、人、の、ま、ま、今、の、道、の、く、く、く、  
名、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、  
の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、  
惟、然、の、意、門、の、最、人、也

物の元、亦、い、り、く、め、り、い、り、な、  
惟、然、  
後、の、い、り、く、く、く、く、く、く、  
松、の、あ、り、く、く、く、く、く、く、  
風、所、あ、り、く、く、く、く、く、く、  
氣、の、く、く、く、く、く、く、く、く、

舟の忌落所所清水村松林周作と云ふ  
者あり所屬しつ子腹部宮中菴山宮  
切石名書物と云ふ濱町おぼせ是より山宮  
の忌落舟宮中庵の号松井と云ふと云ふ若小  
所屬せ住深川

先師曰信実の連名にあつたる風有は後無死  
せしはぬと云ふ人の多しつ此代の後名と云ふ  
又考る信実のりいふせらるるらと云ふとあれと云  
しつと云ふと云ふ

乾盤と叫りくり油は  
雪也  
雪のつとくえと云ふは  
雪也  
雪也

雪のつとくえと云ふは雪の門

ふ竹田いりわあつて流りのつとくえと云ふ  
しつと云ふは雪のつとくえと云ふ  
新や先師のりいふせらるるらと云ふと云ふ若小  
ち付也せん人と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
雪のつとくえと云ふは雪のつとくえと云ふ  
雪のつとくえと云ふは雪のつとくえと云ふ

連休なるは... 二葉殿... 言と乞て梵灯... 此種連休... 行るく禅宮... の中仲... 眼くといふ... 宗道と... 行く連休... 免證と...

極と花... かしこも... 通いよ... 容易なる... 實易なる... 名月と... 月と... 月と...

切字... 切字... 切字... 切字... 切字... 切字... 切字... 切字... 切字... 切字...

雑の交り  
日世の

つる  
雑の

先汗  
雑の

やめ  
雑の

し  
雑の

雑又  
雑の

又雑  
雑の

来  
雑の

是  
雑の

世  
雑の

龜  
雑の

物  
雑の

人  
雑の

石  
雑の

水  
雑の

忠  
雑の

信  
雑の

古  
雑の

庚  
雑の

油  
雑の



草の匂と刷ぬる<sup>カキウシ</sup>の匂  
一吹凡の木の葉と月うば  
お月や鶴の影くまひそ  
その朝日のあはれくぐり

田舎の事

おあの中ふふとあも 映る  
湖の氷漸くと晴ぬく  
青蓮中へ一吹凡の雪  
鳥織籠まの雨とて白ゆり  
ほろあめく 皆氷の 氷

さらけの外よりあはれい  
おれや 拙者よの娘は果してまも  
んるあはれい 意満ちて 末の世よ又て  
あまの事

えい 古風のあはれとて 百ふる  
りお葉といふあはれとて 今も  
一こいふ いぼち武わい 是  
才よのあはれ 千句の中ふ  
と後へい えあはれとて 後  
叶といふ

その朝日のあはれくさり

櫻梅心子の所と木の葉跡

鴨のしらねく瘡痕の池

少くもせはれぬ松の枝も秋

ゆれいふ能む神麻の秋

皆かきよめくふらふ去の空

ゆてかきまゝの海解

山ふらぬ思も生草のあしき

月より見えてはなをむる

眺も夜花と水葉とわらわりの音

木のえん事のそ奉の身

花月としらゆりの月の光

蝉もまゝく定らぬ所

花よ梅とけりといふ事

あつらひとむきしほ梅と花見家

さ湯く梅とちりくせ中ね

梅の影とけり事

あつらひけと鶴とくさ良氏

絶て鳴きし毛の言息

梅は花はけしき 昔はついでと梅は花はけしき

いづれは伝ふ

堂といふやうと春といふはついでにふしとあな

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

清集小舟の舟と春といふはついでにふしとあな

包くの名はけしき 春の所 梅は花はけしき

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

と初音よふは梅の花と初音よふは梅の花

松邊のり

布子もろくく 昔より黒く桃花

とた

津川やろを印と留まろけり

千里

辺身も成くくろくくあまひ

4枚

秋の言もいほぬめられはき

旧徳

房水打目の印や葉中ひ

善松

心津のひくく一変して印も忘るく人の心ゆら  
りくある。

寄信く葉のいぬく

墨すくく流るくく部と

湖のけくあまの

早しすくくあまの

凍川に宿まくあて

蜻蛉ハ流く結ひて糸す

言驚者の重くあまの

伝城の流れくあまの

ひおの小袖くあまの

困り多とほきく御も

目のく御書くあまの

是おのれあてあまの

王と

後一くわれ理店と首尾とをては子あし  
前末の通りも酒を市尾箱ハ長灯々方の  
や一應一いつて用ひたう一唯秋に西行の  
まのい故物こまうこれ一いふれ一いふれ  
たる処多一後鳥羽上皇の書さひ物やと  
是ハハお小書さ一ふ一思一いささ  
重ひゆり一とるゆれそものほにこいかり  
其細さ一筋と一と一まらるるれ

深川流のつら

糸買とつらゆや投紙中一

之新買

雪の事一とつらゆれゆれえ

そ酒買

ゆやゆれ雪あ一か一門の茶

そ茶買

山原一ゆ一雪よつらゆ山折髪

そ茶買

雪よゆれ雪あ一か一門の茶

そ茶買

ゆやゆれ雪あ一か一門の茶

仇の一死

河津松波老人の遺言の音とて此の世  
を幽霊の如くする。詠を何事も知らず  
此の世にこそあつて見んとするに  
言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
終る風情とていふ言はれぬ言はれぬ  
鬼の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
夏と涼言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
流石の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
用事とていふ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
仇の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ

此作の意

仇の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
流石の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
用事とていふ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
よまはらぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ  
仇の如く言はれぬ言はれぬ言はれぬ

神祇抄序

惟神祇抄といふもの世に多し一百年も昔は  
少くも氣力と長生神を祀る處一國極と爲る  
所ありし時事ありしがあつたはあつた我神祇  
に神と爲るもの人々を呼ぶて神とせば神祇  
神祇の時日ありて人々を呼ぶて神とせば神祇  
と云ふん神祇の字はさし置かざらんや神祇  
と云ふは見えしものなりと云ふ神祇の字は  
神と見れば神と云ふ神の字はさし置かざらんや  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は

あつたはあつた我神祇に神とせば神祇  
と云ふん神祇の字はさし置かざらんや神祇  
と云ふは見えしものなりと云ふ神祇の字は  
神と見れば神と云ふ神の字はさし置かざらんや  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は

世尊

又神と云ふ神祇の字はさし置かざらんや神祇  
と云ふは見えしものなりと云ふ神祇の字は  
神と見れば神と云ふ神の字はさし置かざらんや  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は  
神祇の字はさし置かざらんや神祇の字は

樂...の...  
の...  
の...

い...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

海島曲浦

...

...

...

...

明石

...

...

...

...



細浪居るよりのきりか

夕あしねあしねあしねあしね

自画像

七歳とふふぬあの子のうしろ

みこあくととPや人おれは

ます月の小貝ひらんとてほらあまのり  
あしりはあまのりあまのり

浪のちるや小貝とあまのり

遠きあまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのり

うらむの浪あまのり

うらむの浪あまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのり

行概の法

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり  
あまのりあまのりあまのり

紙衣のぬかすも折りんもの気

一極くしるゝ活きくめれくくぬかすの

張るかくきんと中ね宮方のちり

美事やとぬ岩倉のたのむ

草の房を何ありしめひらんもらぬ岩倉の

袖はぬきしりて大信の行きののび

園の帯や帯とよこしつて神のち

泊り集あふ其入白燈はみく入信の集あ

春の入色はあな合の集あれは雲の影あ

篠のあり待たけしあぢり

飯栗の中ふさく

合うりつりまのまよ下すみ

年たぢりく又跡つとめひさや今くは飯栗の

月位法師のちり

木性さやうも経られしまの雨

春眠初覚曉くはらけ

解くくくさぬのハ

菊くくめくさあなと孤波は腐あ

菊のやうあなは古き佛の道

芹焼やとと痛の田井の物水

一 雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば  
雲の影をいづれにうつらうつらと見れば

三ノ前句と働りすこゝ一 四ノ前句と異つて  
あゝ句はく一 〇もたれ葉とて方よりいふの  
中より凡そ一ノ片附づゝを前句といふ  
此語をすゝゝと一ノ句附句の語と考ふる  
所あり

石於京都神以社曰之生一ノ上調ト号  
羅人ハ人セ  
於此或言中卷を其之生と聞書也

徳巴調識書

